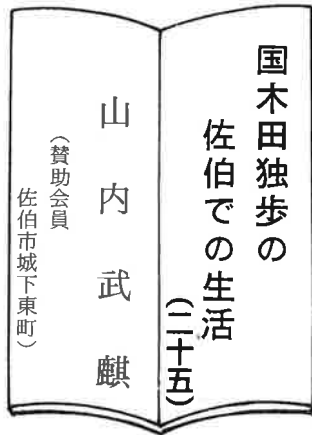


二十七日の富永日記を見ると、このことを記してある。午後十時に教会が終ると収二君に伴われて国木田先生の寓居に行った。今夜は尾間も並河も一しょであった。この夜のことは自分の生涯の中に忘れることの出来ないことであった。先生は

「われらは少なくとも世の中から撰び出されてやや高い眼識と理想を持ったものである。考えるとわれらがつくさねばならない責任は前途に山川の如く横たわっている。我々は人類である。国民であり一個人である。しかも青年である。青年は再び来ない。ただ夢の如く幻の如くに日を送ることは出来ない。君らは才能をもちながらそれを研ぎもせず修養もしないで朽ちてしまう。それを思う



と自分は断腸の思いがする。日本の形勢世界の状況から見てわれらがこんな僻遠な田舎で朽ち果ててよかろうか。そこで自分は一つの策を思いついた。今秋の初めには自分は上京することになるであろう。それで君達も一奮発して自分と一しょに上京してどうか。東京は広く学生も多い。もとより苦難も大変であろうが、自分達の前途を考えればそれ位の困難は何でもない。生活上決して飢えや寒さに困るようなことはあるまい。われら五人で一軒の小さな家を借りて自炊し寝食を共にして、どんな職業でも就職して少しずつでも給金を貰えば暮らすことが出来る。そうして互に励みあって進めば、東京の青年たちの中で頭角を表すことが出来るよう」と熱をこめて話された。

この話は全く意外であった。自分は一も二もなくすぐ賛成した。家のことで前途を考えるとどうしても上京したかったからである。並河も尾間も賛成した。しかもこの二人はずっと以前から二人で上京することを誓い合っていたと聞いて驚いた。話はこれでまとまり往きの旅費と一二月の食糧を用意することを約束した。と、ある。尾間日記にもこのことについて記し、大い

に賛成したとある。

次に星を詠んだ詩がある。

嗚呼兄弟ノ吾が兄弟ノ

兄弟なる天の星よ。

姉妹なる空の星よ。

夕暮に、静かに、独り

野の末を、谷間を、独り

たどりつつ、仰ぎ見る大空に、

なれたちは遠く、遙けく、とこしへに、

静かな、ひかり、かがやくなり。

此の世界、吾れのなごろう此世界。

なれは亦た此の世界の民なる哉。

ひかりのかざりなれ、吾は夜々

あうぎ見る。なれもよなよな

見下ろして、共に大神の無窮に通ず。

三十日

昨日は日曜日。午前教会堂に出席する。宣教師ウイ  
ソン氏が来伯。午後、みんなと一しよに散歩に出かけた  
ら途中で雨が降り出した。それで薬師寺氏の家に集まっ

て雑談した。帰宅して一睡する。夜はまた教会に出席し  
てウイソンと薬師寺の寝言のような話を聞いてうんざ  
りした。

クリストは周りの人に宣教した。しかし一方には何も  
感じず知らぬ顔をしている不幸な人が居り、また一方に  
は偽善で誇るパリサイのやからがいる。今日もそうであ  
った。

カーライルやゲートのような人でも不幸な人の魂をあ  
われみ愛することは出来ない。彼らは智者であり、予言  
者である。自分で苦しんでその信仰を得た。要するに自  
我主我的である。迷う人、愚かな人、酔生夢死する人々  
を心から不びんに思い無限の同情を表すようなことは出来  
ないのである。

しかし、若し、宇宙に真理、大道が存在し、それを悟  
り、信じ、楽しんで人生の真髄を得るものと確信するな  
らば、全然無感覚な魂のなんと悲痛なことよ。自分がこ  
れを信じ得るから希望と永久の楽しみと善とに喜ぶなら  
ば、他の人々のことも考えねばならない。

カーライルは逝った。そして迷える者。苦しむ者は次  
々と絶えない。泉が枯れないのと同じである。

嗚呼宇宙ノ これ迷ひの場処なるか、苦しみのちまたなるか。煩惱の火炎なるか。

吾ノ 吾とは何ぞや。自然の無極と確動とを想う毎に吾の生存の確実を感じず。老るとも、老ひざるとも。と、温かい同情の念について記してある。

次に

樂しか、樂し、悲しきか悲し、吾が情は夫れ自由なり、自然なり。

吾がこころ大なり、吾が望は高し、吾に進歩あり。

古を感じる時、吾が生の「時」を傷み。

今を思ふ時、吾が命の無窮を感じず。

と、自分の心の持ち方を反省している。

昨日徳富猪一郎氏に手紙を送って富永君の文章を紹介した。

今夕、小学校に飯沼源治君を訪ね、暮れ方庭先きで同君の処身のことなどを話し合つた。

今日田村三治君より来信。

『竹取物語』の改作の第一章が出来た。

五月の記について書く。

一日の記

昨夜より今朝にかけて『哀感』のその一成る。

と、ある。この『哀感』という作品は未完で散逸したものであろう。

次に

吾がうちに在る此貴き心。これを外にして吾何を求めん。此の高き深き情、之れを外にして吾何を信ぜんと、記して

この心のこの情は自分の中にあつてその真の光を増してくる。

春の花をこの心は感じ、星と月とをこの心は感じ、他人の心をこの心は感じる。

自分は自分のうちにあるこの心情に感謝しこの心情を信じる。

と、人間の尊い心即ち美しい情を称えている。

二日

昨日吉見のおばから手紙がくる（二十三日に出した手

紙の返事)。

その手紙の趣きは、自分の母が先日吉見家を訪ね三晩泊って遊んだとのことである。その時色々と話があつて母は殊に自分が妻を迎えることを切望していた由で、市山タキはどうだろうかとの考えであつたという。

これは一身上の大問題である。大問題と考えれば大問題である。色々と考えて決することが出来ない。タキを自分は愛しないではない。いや一度恋したこともある。しかし、彼女は決して田満なおんなでない。世にもまれな働き者であるが、その教育程度は子を教えることが出来ない。性質上にあつても劣るところがある。

しかし、自分は果して満足するような女を見出すことができないか。

満足とは欲望のことか。いや満足は満足である。凡ては神にある。満足は心にある。

自分がよい夫であれば良妻でないものがあろうか。

ソクラテスはどうか。哲人はただ「吾」のみである。

ただ吾の確信の上に立っている。凡ては神にある。何も云うことはない。

満足。ただ満足のみである。妻帯して不幸になればな

ってもよい。自分はこれと戦う。前途は前途である。自分は確信の上に立つ。

この一つの「吾」の凡て運命は神にある。何を恐れることがあろうか。

このように吉見のおばから結婚のことについて相談した手紙の返事を貰い、読んでみると、自分の母も自分の結婚に大変乗り気で、候補者まで名指している。独歩は戸迷っているが、幾分気乗りがしているらしい。

次に詩が記してある。

見ヨ天と地を。此の盛春の天と地を。

新らしき約束は吾が前に置かれぬ。

春の草木、此の蒼々の天、大なる自然は言う。

吾に従へと。曰く吾に従へと、只だ吾に従へと。

見ヨ、天と地とを。形式と偶像と礼法とを去れ、此等の衣服は、此の新らしき約束に遇ふて破れおちぬ。

人類の地上に於ける生活、

人類を支配する此の大自然。

吾茲に立つ。新らしき約束は吾によりて結ばれん。

盛春よ、吾を享けよ。

大なる全き美と善の神よ、吾爾を贊美す。

嗚呼嗚呼、時に於て場処に於て無限の大自然よ。

爾は吾が血なり。

凡て吾ヨリ後世に生れ出す可き他の吾に告ぐ。

爾等は凡て自然の兒なり。と

実に然り吾が眼前に爾等を見ず。

只だ大自然を見る、而して爾等は

此の世界に来る、自然の兒よ。

嗚呼吾も自然の兒なり。

母よ。爾自然よ。

と、盛春を称えている。

次に

極めて高い自信の念が起つた。それは、「吾は自然の

兒なり。吾は吾自らに於て宇宙の真理を単明す可き力を有し、義務を有し必要を有す」。これである。

自分の魂は真美を呼吸し得る。そして呼吸し得る肺臓は益々成長し発達しつつある。

真と美は自分のものである。是非ともとらなければならぬ。

と、自信の程を示している。

三日の記には

吾は今ま謎語に封ぜられたる箱を前に置くなり。

箱を開くべきか、開く可からざるか。吾は苦しみつゝあるなり。

と、結婚話についてどうすべきかと悩んでいる。

彼女を妻とすることを承諾すべきか、いや妻をめとるべきか、どうかである。

この箱は眼の前にある。一人の人としてこの箱に對している。

自分は進んで開くべきか、その中から何が出ようと凡てを運命にまかして開いてよいか。

でなければ一も二もなくしりぞけて顧みないか。

開くか開かないかは、この中のものをよくよく考え後にすべきか。

自分は人である。希望がある。責任がある。

この自分のために何が出るか、自分を殺す劍か、それとも自分をみがく砥石か、自分を生かす薬か。自分は活きているのである。

その出てくるものが何であろう。頓着しないでただ開くべきか。そして出て来たものを満足してうけるべきか。

そうだ、そうだ。

悟った。凡てを天に任かしよう。神にまかせよう。むしろ平気で開き、生涯の一波瀾を求めよう。自分は彼女を愛する。願くばこの愛する心で開きたい。そして出て来たものを祝福しよう。

然り然り

箱は謎語を以て封ぜられたり、余は広活の心と愛の情とを以て之れを開かん

其の後は神に在り。

と、結婚話に色々と悩んでいるが、結局この話に乗り気らしい。

昨日、田村三治君よりエマルソン伝（十二文豪の一）贈与され、今日読んでしまった。

次に

嗚呼悠久の天地、紛々の人生。何を求め何を希はん  
忽然として逝く此の生命。されど生命なり。

自然ヨ、自然ヨ、爾自然ヨ吾に告げよ。爾の秘密を  
爾吾を支配す、吾は爾のままなり。

と、果敢ない人生と自然とを対照して、凡て自然まかせであると達観している。

結婚話に乗り気なような記であったが、次のようにこの話を断っている。

吉見おば様に返事を出した。妻をめとめることはやめると。

虚栄と肉情を離れて判断せよ。

虚栄はひそかに曰く妻は爾の事業をさまたぐと。肉情は曰く妻は愛らしく爾に接吻し抱擁せんと。

よくない。よくない。悉くよくない。

かようであればめとるもめとらぬもよくない。ただ一言で決断する。

今は吾が変化の時機なり。熟しつつあるの期なり。

故に判断の権力を有せず。故にめとるもめとらぬとも決する勿れ。只だこれを延期せよ。自然に決定の時は来らん。

然り、大に然り。

と、結論づけている。延期するといふのである。

四日の記

昨日昨夜の疾風暴雨にひきかへて今朝の美はしさ春の終り夏の初めの朝の美はしさ。

早朝起き出でて散歩す。日巳に昇れり。新緑雨にあ  
らはれて緑いよいよあざやかに、朝風は冷気を帯びて  
軽く面を払ふ、蒼空の蒼々たるを見ヨ。

仲の谷に至る、山かげは影ひややかなり。梢頭に光  
輝あり、小鳥は所々に囀る。

と、ある。一日一夜吹き荒れた春のあらしはようやく晴  
れ、朝の美しさに誘われて散歩に出て、仲の谷（岡の谷  
のこと）へ行っている。

そして、自分は黙って歩く、左右をふりかえったり、  
青空を仰いだりして静かに考えた。

嗚呼真実の生命よ来れ、妄想よ去れ。影の生命よ去  
れ、妄想の苦楽よ去れ、真実の生命のよろこびよ来れ  
と。

ああ実にそうだ。前途があると云うな。前途を考える  
ことは妄想である。妄想は「時間」の生命である。「時  
間」の生命は自然が与えてくれる最も真実な生命である。  
永久の生命を殺す。

仲の谷の中央を見よ。累々と並ぶ古墳を見よ。古墳は  
「時間」の生命をあざけている。

ああ永久の自然よ、美よ、神よ愛の神よ、自分はこの

神をはなれて何にあこがれよう。

草を見よ、おお清き風よ、潔い露よ。

願くば妄想よ去ってしまえ、悪魔だ。自分をこの真実  
の生命から離し、自然から神から遠ざける。

「時間」の生命は呪うべきである。時間は時間であり  
自然の法則である。しかし人は時間のうちにあって、時  
間の外にある生命を忘れたら影の人となる。

そして

清き風よ、潔き露よ、美妙なる自然よ、嗚呼美よ愛  
よ、吾を妄想の生命より救へ。

と、祈っている。

次に

心から子供を愛せよ。子供の無邪気な品性が自分の心  
に流れ入ってくるであろう。心から春を愛せよ、草木の  
美を愛せよ、更らに進んで永久の生命の天地の霊を愛せ  
よ。自分の生命もまた真実で永久で、美であり楽しい堅  
実な生命となるであろう。これは言葉だけではない。

今、高瀬の統（むね）坊が来ていた。この七歳の子供  
は無類な無邪気でまじめな子である。自分は子供を愛す  
る癖がある。今になってこれは実に幸せな性癖であると

思う。

統坊が帰って感じたことである。記し置く。

この高瀬統坊とは高瀬統成氏のこと、この人は後に佐伯市収入役を務めた。

次に

不死を説き、永久を歌った古の人々は何処にあるか。

彼らはみんな死んだ。

しかし見よ、天地は死なない。人類の生命を見よ。更らに進んで宇宙の生命を見よ。

一つの生命とこの大宇宙の生命とを深く考えて、考え合わせるものは幸せである。彼は死に勝ったのである。

呼吸せよ、此の神の生命を。然らば古人も吾なり。来者も吾なり。

と、永遠の生命を考えている。

次に詩がある。

去れヨ妄想の生命

来れヨ真実の生命

大空に燦爛たる星ヨ、常に吾を見下ろせ。

凡ての時の夜毎に吾を見下ろせ、其の深き光を以て

真実の希望よ来れ

大自然ヨ、爾希くは吾に真希望を与へヨ、

妄想よ去れ、時間の私生児ヨ去れ、

されど妄想より煩惱に生滅する人間の意

此の天地間遂に如何

あはれむ可きは此等の他の吾なり。

真に憐れむ可き也

と、妄想を払って真実の希望に生きよと教えている。

五日

よく考えてみると自分は宇宙万有人間生存などについて何も知らないようだ。実に何も知らない。

自分は愚者である。愚弄されている。

しかし、この世間には勿論智者ない。みな知らないことは知らない。

自分はせめて知らないと言うことを知った。

実に何も知らない。

宇宙は人間にとってあまり大きすぎ、深すぎる。自分はまだそう感じる。それで安んじていられるのである。

次に

事実の前には吾が感情動く



大自然、これ吾が眼前の事実なり

英傑、詩聖、これ吾が眼前の事実なり

されど更らに驚く可き事実これなり

曰ク此世界には愚迷にして其のまま死に去る人間の  
数限りなし

嗚呼これ何たる事実ぞや。

事実ぞや。

と、愚迷のまま死ぬ人間の多いのを悲しんでいる。

七日 春雨霽々

昨日は好天気、収二の外五名の同遊の士と一しよに二度目の銚子淵を探った。美しいことは前の時よりまさっていた。それは新芽の時節であったからである。午前七時半出発。夜の九時帰宅した。五名の者は富永徳磨・飯沼源二・尾間明・山口行一・薬師寺育造。

前来た時は案内者を雇ったが、今度はわれら兄弟が案内者となった。前の時は滝を見なかったがこんどは溪流をさかのぼって進んだので滝の下に出ることが出来た。

こんな清遊は同伴者が三人以上はよくないことを昨日初めて経験した。同伴者が多いと無益な話が多くて、自

然と談話することが少ない。残念なことである。

新緑はとても美しかった。しかし自分の心は閉じたままであった。この一日の遠行は幻のようである。

と、第二回目の銚子淵探勝記を記してある。

この日の尾間日記にもこの遠足のことを記してある。

七時半に佐伯を出発して小川の銚子淵に向かった。佐伯を去る西五里の処にある。幽邃の地として有名である。七名で握飯を持参する。愉快であった。帰り道切畑の祇園神社に参り、勝尾で鰻頭を買って食べた。

とある。

「国木田独歩の佐伯での生活」の作者山内先生は、昨年十一月に亡くなりました。ここに謹んで先生の御冥福をお祈りいたします。

なお、原稿は、まだあと十回分ぐらいありますので、引き続き掲載いたします。